

ハリファックス滞在記

経済学部教授 渡辺 淳 一

2005年の夏から一年間、カナダのダルハウジー大学で長期在外研究をおこなう機会をいただきました。今ではあれは夢だったのかなと思うようになってきましたが、その回想です。

まずは到着

住むところは自分の目で見てから決めようと思っていたので、住まいの紹介の依頼も下調べもなにもしていませんでした。しかし、それが失敗。アパートや貸家は9月1日からの一年契約が基本で、学科の人たちにもずいぶん探し回っていただいたのだが、8月の途中から貸してくれる適当な物件を見つけることはできなかった。迷える新参者を見て、「しばらく私の別荘に仮住まいしたらどうだ」とオスバーク教授が救いの手を差し伸べてくれた。これでホームレスになってしまう危機をなんとか回避。カナダでの生活はいきなり夏のパカンスから始まってしまった。まずは順調な滑り出しだったのか？

ハリファックスの町

アトランティック・カナダ最大の都市であり、政治、経済、文化、教育、医療などの中心地。人口は約35万人。とは言っても、その面積は福岡県より一回りも大きいので比較は困難であるが、市街地の人口は20万人ほどなので、日本の感覚で言うと地方の中堅都市といったところである。

場所は「赤毛のアン」で有名なプリンス・エドワード・アイランドの近く、あるいは、レオ

ナルド・ディカプリオ主演の映画でおなじみの豪華客船タイタニック号はこの沖で海の藻屑と消えました、とえば分かる人も多いかもしれない。



この町は1749年、英仏両国が北米の覇権を争っていた時代、英国軍によって要塞都市として拓かれた。現在ではスコットランドとアメリカを足して2で割ったような街並みで、夏になると大型客船が着岸し、市内は観光客で賑わう。なにかと「カナダで初めての」や「北米で最古の」などの枕詞が付くのもおもしろい。

ダルハウジー大学

カナダ建国約50年前の1818年創立。院生を含む学生数は約15千人。医学や法学、環境科学などで有名な沿岸諸州で最大の総合大学である。キャンパスはユニバシティ・アヴェニューを中心に細長く続き、蔦の絡まる石壁の建物や新築の近代的なビルディング、そして、古い民家を改造した木造の一軒家から成り立っている。

経済学科は一部3階建ての木造家屋3棟から成り、そこに研究室とセクレタリーのオフィスなどがある。トイレは元々がバスルームだっただけにやけに広かったり、廊下や階段は鶯張りであったりしたが、文系センターの住人としては、それはそれで懐かしい。



ランチの時間

昼食は学科のラウンジで弁当を食べることが多かった。午後1時になるとみんなが集まり、サンドウィッチをほおばりながら、りんごをかじりながら、ひと時の歓談。ただし、ただの世間話もついつい経済分析の対象になってしまい、苦笑いすることも度々であった。また、当然であるが、カナダは歴史的に国境の南にある我侭な大国の影響を強く受けてきた。そのせいか、合衆国に比べてこの国はなんと優れているかといった趣旨の話をよく聞かされた。仲が良いのか悪いのか、なかなか心境は複雑のようである。

年明けの国政選挙の際に、各党の獲得議席数の賭け（後日、それは予測という言葉に修正されたのだが）をおこなった。なんと外国人である私が勝ち、賞金の3ドルとめったにない尊敬の眼差しを獲得した。自由党はなんだかんだ、保守党はどうしたこうしたなどと、彼らなりの時事講談を一生懸命に聞くのだがよく分からない。結局、テレビで各党首の顔色と話し方から伝わる雰囲気だけで判断したのだが、それが功を奏したようだ。



上がったもの

2005年の春には1ドル85円程度だったカナダドルは、秋の終わりには105円まで上昇し、その後、高値のままで推移した。私の所得は実質2割以上減った計算になる。このようなことになろうとは思ってもみなかった。日頃から経済学くらい勉強しておかなければならないという教訓なのか、それとも何の役にも立たぬということなのか・・・。

もうひとつ。秋から春にかけての気温も上がりっぱなし。ノバスコシアの誰もが経験したことのない暖冬で、とうとう気温は氷点下20度を下回することはなかった。外を歩いて遭難するのではないかという不安は全くの杞憂であったが、もうちょっと極寒を楽しみたかったなというのも正直な気持ちである。

終わりに

この度は学内の多くの方々のご助力で在外研究に行くことができました。この場を借りまして、改めてお礼を申し上げます。また、居心地の良い時間と空間を共有してくれたダルハウジー大学経済学科のみなさん、暖かい隣人付き合いをしてくれたブリッジス・ストリートの人たち、無料の医療サービスと子供たちに素晴らしい学校教育を提供してくれたノバスコシア州政府、そして、楽しく一年間を過ごしてくれた妻と子供たちにも感謝したいと思います。

天使とスター達の街での1年

工学部教授 モシニャガ, ワシリー

2005年9月から一年間、アメリカ合衆国のカリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下UCLAと書きます）の客員研究員としてロサンゼルスで過ごす機会を与えられた。滞在中に体験、感じたことを思いつくままに書き止めてみたい。

見栄を張りな天使とスターの街

直訳すると“天使たちの街”となる、ロサンゼルスは400万人以上もの人が住む街です。ロサンゼルスと言えば、世間の“スターたち”を産出する映画産業やテーマパークなどを思い浮かべる人が多いかと思います。実際に、ハリウッド通りのタイルに描かれた星型に限らず、ビバリーヒルズやマリブ、サンタモニカのあたりに行けば、世界的に有名な俳優やミュージシャン、コメディアンなどのスターたちを見かけることは珍しくありません。

ハリウッド周辺は、映画産業にそそぎこまれる莫大な資金が循環するため、スターたちの高級なライフスタイルを象徴するものでいっぱいです。そのようなロサンゼルスでの生活は映画、より正確にはコマーシャルに似ていると思います。どんなコマーシャルでも、それらの目的は製品を販売することです。実際、宣伝文句は製品に関係しておらず、外見やイメージといった印象に関係しています。専門家は、コマーシャルでは製品の副作用や制限がとてもしゃも小さな文字で示されているか、早口で話されるか、チラッとしか見せられないので、ほんの少しの人しかそれらを理解できないということを知っていま

す。

私の印象では、アメリカ人の第一目的は自分たちをできるだけ高く売り込むことにあります。そのため、彼らはコマーシャルのように虚勢を張ります。まず、彼らはいつも笑顔です。アメリカでは笑顔が成功に関連しているので、多くのアメリカ人はしばしば作り笑顔を“身に着けて”います。私は、彼らのそんな笑顔を“身に着ける”術に何度も感心させられました。まず、雪のように白い歯の持ち主の多さに圧倒です。アメリカ社会では整った笑顔が非常に重要な「武器」なので、多くの人々は歯のホワイトニングと矯正のために毎年何千ドルも支払います。このような自己プロデュースは現在、アメリカで最も顕著に行われています。

次に、アメリカに住む人は劇場やバレエ公演を見に行くときには普段着ですが、職場では最も良い服を身に着けます。仕事中に宝石や高価なスーツを身に着けている人をたくさん見かけます。しかし、常に彼らが成功した人間のように振舞う様子を見てみると、実際に成功していない人たちにとってこの社会で暮らすことはどんななのだろうかと、私は疑問に思うこともありました。

アメリカ社会のほかの目につく特徴として、「自分は素晴らしい」と宣伝することが挙げられます。誰も自分を賞賛してくれない場合、アメリカでは自分で自分を賞賛しなくてはなりません。どこの職場でも、「Aさんは 会議に出席しました」「彼（彼女）は 会の会員で

す」などと書かれた額が、壁のあちこちに飾ってあることに私はいつも驚かされました。参加費を支払うのに、会議に出席したとか会員だとかいうことは問題ではありません。しかし、壁に多くの額があるほど、その人はより“立派である”と考えられています。

素晴らしい気候

私を驚かせたもう一つのことは、その気候でした。北九州や四国の松山・徳島と同じ北緯34度に位置するロサンゼルスでは、太平洋の恩恵を受けた南カルフォルニアの温暖な気候を満喫できます。突き抜けるような青空と、湿度の低いカラッとした暖かい日がまるで映画の中のように、よく長続きします。1月や2月といった真冬でさえ、ハワイのような暖かさなので、クーラー無しで部屋や車中で過ごすことはできません。この1年の間、嵐はおろか雨もほとんど降りませんでした。天使の街だからこのように素晴らしい気候なのかな？

コントラストの街

私はロサンゼルスの家賃がこれほど高いとは考えてもいませんでした。もちろん地域によりますが、“獣が自由に歩き回り、人が檻の中に住んでいる”と言われるほど、治安があまりよくないロサンゼルス南部でも、家賃はそう安くありません。そんな地区は、“ギャングたちの動物園”と称されることがあります。入り口と窓が金網に覆われた檻のような家の数は、その地域の壁にある汚い落書きや、落ちていたゴミの数に比例しています。落書きやごみの多い地域では、車で通り抜けることでさえ危険だとされています。しかし同時に、そんなところからちょっと離れると日が暮れてからも人通りが絶えない地区もたくさんあります。ロサンゼルスでは常に慎重な行動が求められますが、その危険の程度はどの地域にいるかということに強く

左右されます。

UCLAは、ウエストウッドというロサンゼルスでも屈指の住宅地域に建っています。ビバリーヒルズ、ベルエアーやプレントウッドといった高級商業・住宅地域に囲まれ、たくさんの店や劇場、映画館、レストラン、バーやカフェがある地域です。多くの人たちが、この快適な“天国”に住みたがるので、ウエストウッドの家の価格はここ5年間で40%以上も跳ね上がり、今では1件あたりの値段が、100万ドルを超えています。家の所有者は、それを維持するために10万ドル以上の年収が不可欠とされます。また、UCLAに通う学生からの高い需要のために、アパートの家賃は雨後のタケノコのごとく、毎年10%ずつ価格が上昇しています。

その様なわけで、私が自分の住むアパートを探しに行ったとき、2LDKで1ヶ月当たり千六百ドル（日本円で約19万円）かかると知り、開いた口がふさがりませんでした。東京では結構良い3LDKマンションを借りられる価格に匹敵しますが、私のアパートの小さな台所には小型冷蔵庫と食器洗い機に加えいくつかの棚があるだけでした。とは言っても、私は非常に幸運だったのです。第一に、そのアパートは大学の職員用なので、その地域の同じようなアパートに比べて最も家賃が安いところでした。第二に、UCLAキャンパスのすぐそばという好立地でした。そのため、私は家から職場まで長時間運転する必要も、駐車場代を支払う必要もありませんでした。そして最も重要なことは、そのアパートはUCLAに管理されており、大学の職員以外に入ることができないということでした。唯一の問題は、一年しか住まないのに、食器から家具まで全てのものを買い揃えなくてはならないということだけでした。

無愛想なサービス

日本と比べると、アメリカのサービスは無愛

想に感じられました。

第一に、レストランやカフェ、バーやタクシー、ホテルなど、どこへ行ってもチップが求められます。もし、小額のチップしか支払わなかったら、次のサービスは期待できません。

第二に、日本では店員は客を待たせないように最大限の努力を惜しみませんが、アメリカでは全くそのようなことはありません。店員同士がおしゃべりを終えて、儀式的に「次の人」と呼ばれるまで、長い間待たされることは日常茶飯事です。

第三に、言われた言葉を信じられないことです。日本では、約束し、その約束に基づいて私スケジュールを組むことができます。これは、日本社会では人々の間の信頼性がより高いことを示していると思います。ロサンゼルスではそうではありません。滞在中、私はそれを何度も学びました。最初のレッスンは、ベッドを購入したときの事です。支払いの後、店員は「3日以内に届けます」と言いました。ところが5日経ってもベッドは届きません。電話をしたところ、「ちょっと予定に問題があったので、ベッドは来週にしか届けられない」と言われました。そして、3週間後、彼らは全く違う色のベッドを届けに来ました。それからしばらく待って、やっと彼らは頼んだベッドを届けてくれましたが、なんとそのベッドは3日後に壊れてしまいました。なんてこった！

大学

UCLA はアメリカでは最高位とされる大学のひとつです。31のアカデミックプログラムが、US National Research Council (米国学術研究会議) によって、トップ20にランク付けされており、米国内で上位から3番目にあたります。UCLA は驚くべき場所です。以下にいくつか例を挙げます。

1. 勉強に、スポーツに、娯楽にぴったりな快適で美しいキャンパス

キャンパスにある全ての建物は、異なった時期に作られていても、建築様式は統一されています。スペイン式の建築様式はUCLAのトレードマークです。キャンパスは広大で、学生たちの活動をサポートするたくさんの施設があります。学生はスポーツジムやプール、映画館を無料で利用できます。また、市内のバスやアトラクションの割引制度、キャンパス間をつなぐ無料バスがあるなど学生は優遇されています。コンサートやオペラ、バレエ公演などの興味深いイベントですら、UCLAの学生は15ドル以内で楽しむことができるのです。

2. 地域社会からの大きな資金援助

2006年度におけるUCLAの資金総額は、31億ドルに上ります。このうちの40%が、ホールやスポーツ場、プールなどの大学施設を民間企業へ貸し出すことによってまかなわれており、さまざまなイベントを計画するために使われます。去年一年間では、6つの主要なホールで何と5百以上ものイベントが開催されました。他の大きな資金援助は個人によるものです。毎年あらゆる分野の多くの有名人が、UCLAに多大な寄付をします。大学はキャンパスの建物にスポンサーの名前をつけるか、記念にスポンサーの名前を刻み込むことによってスポンサーに敬意を表します。

3. 莫大な研究費

2004年度、UCLAは科学と工業に対する研究費用が米国の公立大学の中で第一位でした。2006年のNSFの報告による

と、UCLA は国内で第二位となる7億7300万ドルを研究に費やしています。この大きな研究費は、UCLA が優れた研究施設を提供し、新しい研究結果を引き出し、それによって産業界からより多くの契約や資金を獲得している結果です。実際に UCLA は5人のノーベル賞受賞者とたくさんの国民栄誉賞受賞者がいます。ここはまさに、スターがスターを生み出した大学です。

4 . 博士課程の学生人数が多い

素晴らしい研究のために、UCLA には博士課程の学生たちがたくさんきています。工学部だけでも現在782人の学生が博士課程プログラムに在籍しています。

5 . 授業料

カルフォルニア州の住民であれば、UCLA の年間授業料は大学で6,600 \$、大学院で7,500 \$ ですが、他州の住民は大学で23,500 \$、大学院で22,417 \$ です。68%の大学生が1年あたり平均で12,100 \$ の奨学金を受け取っており、80%の大学院生が平均25,500 \$ の奨学金を受け取っています。すばらしいですね。

最後になりましたが、私は UCLA で働き、“天使たちの街” でスターたちと共に暮らすという素晴らしい機会を与えてくださった福岡大学の皆様に、本当に感謝しています。ありがとうございました。



英国 Nottingham 大学病院での中年内視鏡医の経験

筑紫病院消化器科講師 八尾 建史

私は2005年4月から1年間、在外研究員として、英国の Nottingham 大学病院を訪問する機会を得た。仕事の内容は、英国の Nottingham 大学病院 Queen's Medical Centre の消化器病センター Wolfson Digestive Disease Centre で臨床医として主に消化器内視鏡の指導と内視鏡を用いた協同研究である。Nottingham は、ロンドンから特急で2時間ほど北に行った England の中小都市で、ロビンフッドで有名な以外はさほど特徴のない大学を中心とした町である。別の言い方をすると、日本人がほとんど住んでいない典型的な英国の中小都市である。Nottingham 大学は、英国のオックスフォードやケンブリッジ大学がカレッジという小さな大学の集合体から成っているのに対し、大きなキャンパスのなかにいくつもの学部がある日本の総合大学と同じ組織である。規模はかなり大きく学術的にも英国のトップ7にはいつも名を連ねている。

英国で臨床医として活動するには、英国の臨床医の資格を取る必要がありこの点に最も労力を要した。具体的には GMC という英国の医務機関に登録する必要があり、英国または以前の英国領で研修を受けた医師や EU の医師は比較的簡単に登録ができるが、極東の日本の医師が英国の臨床医の資格を取るためには、英国の教育機関である British Council が行う、受験者には難関であることで悪名高い語学試験で高い点数をとり、資格審査のための書類を提出し、許可を待たなければならなかった。私の場合は、

在外研究の期間が先に決定していたため、日本での多忙な診療と研究の合間に英語の勉強をし、2回目の試験の結果なんとか基準の点数をクリアーし、渡英直前に書類を提出し、渡英後に臨床医としての許可が下りるといふきわどいスケジュールであった。以前は、英国は外国人医師に門戸が広く比較的簡単であつたらしいが、近年、社会的な問題が続出しかなりきびしくなったそうだ。VISA については、幸い在外研究員として福岡大学からの派遣であり、当地で就労する必要がなかったので、英国大使館に Academic Visa を申請し、最長1年間の許可を簡単に取得することができた。

Queen's Medical Centre は、「ゆりかごから墓場まで」で有名な英国の健康保険機関 NHS (National Health Insurance) が運営する病院としては、英国最大規模のベッド数1200床を有し、世界中からいろんな民族の医療スタッフや患者が集まっている人種のるつぼそのままの病院である。私は、日本の最先端の消化器内視鏡を用い、医療をスタッフに指導するかたわら、研究のプロジェクトを立案し実行したり、病院内のカンファレンス、抄読会に参加したり、スタッフに講義をするなど外来を除けば日本の大学病院の医師とほとんど同じ生活をしてきた。臨床では、日本ではほとんどお目にかかれぬ疾患や Evidence-based medicine に基づいた診療態度など学ぶべきことがたくさんあり、同時に、英国の医療が抱える問題を実際の現場で理解でき、

数日間大学病院を訪れただけでは決して経験できない貴重な体験をした。

研究面では、日本で確立した新しい技術を、日本ではまだ少ないがこれから増えるであろう Barrett 食道を発生母地にした腺癌の早期診断に応用し、新しい知見を確立できた。そして最も重要なことは、手に手をとって日本の進んだ内視鏡技術を教えることで国際間の多施設共同研究を行う際最も問題となる医療技術の quality control ができたことである。しかも英国の病院には、専門医を目指し世界中から若い医師が研修に来ているので、彼らにも同様の指導ができ、彼らが帰国したときには、英国以外の国の医師とも多施設で国際的協同研究ができる可能性が広がったことである。基礎的な研究については、私を招いてくれた Hawkey 教授が、彼の専門分野である薬剤の粘膜障害に対する研究に私のアイデアと技術を応用し、協同研究を現在進行中である。

さらに大学内での研究者間の交流も盛んであり、医学部内での研究の交流はもとより、公には自分の研究を医学部以外の研究者の前で発表する機会がもうけられており、それをきっかけとして、隣のキャンパスの工学部や理学部の研究者とも学術的交流が始まり、現在も協同研究を行っている。このようなシステムは、福岡大学も総合大学なので学ぶべきものがあると思う。さらに、英国も日本と同じく小さな島国なので、大学間の交流・情報交換も盛んであり、しばしば他大学の研究者が見学や講演に来たり、私自身も、University College London や Cambridge 大学などに講演に招かれ、英国の研究者と膝をつき合わせて議論をする機会を得たことは光栄であった。ヨーロッパ内でも、同じく、お互いに近い距離なので、交流が盛んでミュンヘン大学へ講演に招かれたり、オランダやドイツの第

一線の施設を気軽に訪問できる地の利はありがたかった。

私は、小学生の子供2人と女房を含む家族で渡英したが、生活は、正直に言うと大変苦労した。経済的には、英国は近年マイルドなインフレ状態が続いており、物価は高く家賃やガソリンを始め日本のほぼ2倍であった。住宅事情も悪く、外見からは、「イギリスの古くて豊かな家」という本もでていいるほど魅力的に見えるが、日本人にとってはトイレ、お湯や暖房を供給するボイラー、電気などしょっちゅう故障ししかも修理が遅く、寒い英国の天候の中、大学の図書館のシャワーやトイレを借りに行ったり、生活面では家族には大変つらい思いをさせることが多かった。治安もあまりいいとは言えず、どろぼうなどの軽犯罪は日常茶飯事であり、テロの影響は Nottingham には直接は無かったものの、空港ではいつも緊張感が張り詰めていた。学校はインターナショナルスクールなどももちろんなく、渡英前に懸命に情報を集め、地元の私立の学校で年度の途中に日本人を受け入れてくれるところを探した。私立なので、高額の学費を払うはめになったが、いい意味で英国の紳士・淑女を育てる伝統と実績が根付いているところであり、しつけは厳しいものの、学友は最初言葉が話せない子供に対しては親切であり、一般の授業だけでなく、英国の伝統競技であるクリケット、テニス、チェスなどもカリキュラムに組み込まれており、子供の学校生活はとても充実し楽しんでくれたのは救いであった。もちろん宿題は、英語の文庫本を一冊読んで、要約し感想を書くなど、高度な英語でたくさん出されるので親は悪戦苦闘したのはいうまでもない。

紙面の関係で細かいことは、書けなかったが、公私共に3年間分、英国に滞在していたぐらい内容の濃い滞在であった。最後に、世界中から

様々な慣習や価値観が異なる人間が集まっている環境のなかで、医師としての診療、医局の中での討論、大学での共同研究、大学間の交流、そして苦労した生活など極東の島国日本では、けっして経験できない貴重な機会を与えていただいた大学関係者と小生の不在中、診療や研究をカバーして頂いた筑紫病院の松井教授をはじめとするスタッフのみなさんに改めて感謝の意を表したい。

